

台湾珈琲の故郷—北大演習林

北海道大学農学博士・北海道大学パートナー台湾
菅 大志

はじめに

北海道帝国大学が台湾で珈琲栽培をしていたことをご存知だろうか？

筆者は南投埔里の北大演習林（北海道帝国大学農学部附属台湾演習林）での珈琲栽培について報告し、北大演習林百年祭を開催した。その様子は本誌の2017年「演習林と珈琲の百年物語」^[1]と2018年「続・演習林と珈琲の百年物語」^[2]に詳しく書いた。また台湾のC³offee 珈琲誌に「台湾珈琲的歴史再発現埔里演習林」^[3]を発表した。

その後、さらに北大演習林珈琲の研究を進め、2018年4月から2020年6月、北大生協「きぼうの虹」に『台湾通信』として14回連載した^[4]。そして2022年7月-2023年4月、国立自然科学博物館 想入啡啡：細説珈琲特展「臺灣珈琲過去與現代的連結」にその成果が展示され、台湾珈琲の故郷として北大演習林が認知されるようになってきた。

本稿では、日本統治時代の台湾において、北大校長からスタートした珈琲栽培が、駅伝の襷のごとく北大卒業生たちにつながり、北大演習林でゴールした足跡をたどってみたい。

台湾総督府殖産局と北大卒業生とのつながり

北大（札幌農学校・東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学）卒業生が最も早く赴いた、最も人数の多い場所、それが台湾である。日本が台湾を領有した1895年から終戦までの50年間、北大卒業生を台湾に送り続けた。このことは、「台湾へ渡った北大農学部卒業生たち」^[5]に詳しく述べられている。

台湾総督府は「農業台湾」の基本政策を掲げ、開拓期の北海道で農学を専攻した北大卒業生は同殖産局で重用されていた。

台湾総督府殖産局では珈琲栽培の試験が行われており、この珈琲栽培を担い北大演習林までつなげる北大卒業生があらわれた。

さらに、この北大卒業生と台湾総督府殖産局をつなげる基点を作ったのが殖産局長の橋口文蔵と新渡戸稲造であり、台湾における珈琲栽培を推進した重要人物でもあった。

橋口文蔵（札幌農学校校長）（台湾在勤1895-1898）



図1 橋口文蔵（北海道大学大学文書館所蔵）

橋口は、札幌農学校初代教頭クラーク博士が学長だったマサチューセッツ農科大学で学び、帰国後に札幌農学校校長を経て、北海道庁第二部長となっている。

1895年、初代台湾総督の樺山資紀の甥にあたる橋口は、初代殖産局長（次々代は新渡戸稲造）となる。

前年にメキシコ植民地の踏査があった橋口は、世界熱帯国中の珈琲栽培の適地について述べている^[6]。この経験によって橋口は、台湾にコーヒー試植の必要を認めた^[7]。そして「當殖産課ニ於テハ本島ニ珈琲事業ヲ輸入セン方針ヲ以テ」とある^[8]。

こうして殖産局ではその下部組織にあたる農事試験場や恒春熱帯植物殖育場などにおいて、珈琲栽培の試験が行われていった。

このように、橋口殖産局長による珈琲栽培の決定は「台湾珈琲の父」と呼べるほど重要なものであった。

1895年、珈琲の種子を外務省経由でメキシコより取り寄せた橋口^[9]は、その種子を次項の横山壮次郎に、後に北大演習林が開設される埔里に播種させる。

1897年、台北県知事になった橋口は、県下に珈琲木があることを知り、この珈琲木の種苗を得るべく依頼したのも横山だった。

横山とは、札幌農学校校長時の教え子で、北海道庁第二部の部下で、薩摩藩出身という強いつながりが3つもあった。

横山壮次郎（札幌農学校第8期生、札幌農学校助教授）（台湾在勤1895-1906）

1895年、最初に渡台した北大卒業生である横山は殖産局に所属した。横山の家には必ず職務の参考品がありコーヒーノキが2本あった^[10]。薩摩藩出身で、初代文部大臣森有礼の甥にあたる。

1897年「明治三十年五月埔里社撫墾署事務報告」^[11]には埔里社撫墾署長事務取扱の横山の名前が、七月には「昨年（1896年）総督府殖産部ヨリ試植ノ為回送相成リタル珈琲ノ種子…播種タルモ…発芽ヲ見ズ…本年ハ先ツ全力ヲ茲ニ注キ…珈琲…栽培ヲ施サント欲ス」^[12]とあり、横山の押印もある。この珈琲の種子は、上記の通り橋口が取り寄せたものであった。

また、「珈琲樹栽培調査復命書」^[8]には、「珈琲栽培は高地ヲ要スルヲ以ッテ現今ノ撫墾署所在地

ヲ適当トス」とある。そのため、埔里社撫墾署長事務取扱の職務にあった横山は、当時11箇所あった撫墾署の中で最も高地であった埔里社撫墾署に「全力ヲ茲ニ注キ」種苗を播栽したのは間違いない。なお撫墾署設立は橋口が計画したもので、次々項の柳本通義が事務総括の責任を負っていた。

また、1897年横山は橋口の命を受け、台北県擺接堡冷水坑庄（現新北市土城区冷水坑）の珈琲木を調査すると共に、珈琲の種苗を得て、台北市東門外（現台湾大学医学院）の殖産局農事試験場に播栽し育苗する。このことは、『横山壮次郎君』「故横山壮次郎君追懷録」^[7]に詳しい。

そしてこの珈琲の苗木が、1902年3月、次項の新渡戸稲造が創設した恒春熱帯植物殖育場に最初に移植された珈琲木となった。

新渡戸が編纂兼発行者となった『横山壮次郎君』の「故人を懷ふ」^[13]には、「職務の関係上又同窓の縁故があるから殆毎日逢ふた、逢ふ毎に親密の程度も益加はる様になつた」と述べる関係となっている。

新渡戸稲造（札幌農学校第2期生、札幌農学校教授）（台湾在勤1901-1904）

1901年、新渡戸は『武士道』を出版した翌年、台湾総督府長官の後藤新平により三顧の礼で殖産局長として迎えられた。

殖産局長となった新渡戸は「臺灣に赴任するや専ら札幌出身者のみを用ゐて駒場農科の系統を引いたものは一人も呼ばない呼ばないのみならず寧ろ大に排斥した^[14]」とあり、東大卒業生よりも北大卒業生を重用した。

1901年、新渡戸は田代安定による「熱帯植物殖育場創設之議」を採択し、1902年殖産局恒春熱帯植物殖育場が創設され、横山が育苗した珈琲木が、同場の最初の母樹となった。このことは『横山壮次郎君』「故横山壮次郎君追懷録」^[7]に「明治三十五年恒春殖育場創設際同苗二百本を横山君の厚意に依て配布を受け之を携帯して小字テラソ母樹園内に栽付一小試験區を開けり便ち殖育場コーヒー木栽培の嚆矢と爲す」とある。

1905年、新渡戸は、殖産局恒春熱帯植物殖育場を訪れた（図2）。



図2 右上から時計回りに、横山壮次郎、新渡戸稲造、柳本通義、東條秀介
(1905年台湾統治状況視察の新渡戸稲造、高岡熊雄ら一行 北海道大学大学文書館所蔵)

この写真は、横山壮次郎→新渡戸稲造→柳本通義と札幌農学校の卒業生同志が台湾の珈琲栽培でつながっている重要な証拠である。

この時、新渡戸は当時試植中の珈琲木に就いて「特に奨励の辞」を与えている（「前殖産局長新渡戸博士来場ノ事」^[15]）。

新渡戸は札幌農学校では学生・教師時代ともに外国人教師と珈琲を飲んでいたはずで、また欧米留学時代、売店で珈琲を飲んだ記録もあり、欧米の珈琲文化に直に触れていることから、珈琲産業が有望であることは肌で感じていた。そのため珈琲栽培に「特に奨励の辞」を与えたのだろう。

つまり新渡戸の採択があったからこそ、この恒春熱帯植物殖育場が創設され珈琲栽培が始まり、そこを訪れた新渡戸が珈琲栽培に「特に奨励の辞」を与えたからこそ、当時3年目で試植中だった珈琲木の栽培が本格的に始動し、珈琲栽培の成功につながったと言えよう。こう考えれば新渡戸は台湾珈琲の歴史に必要不可欠な人物であったと言っ

ても過言ではない。

さらに、この時の柳本は恒春熱帯植物殖育場の技師になったばかりであり、新渡戸による珈琲栽培に「特に奨励の辞」は強く響いたことだろう。

柳本通義（札幌農学校第1期生）（台湾在勤1896-1907）

柳本は札幌農学校第1期生でクラーク博士から直接講義を受けた。北海道庁勤務時代は橋口文蔵の部下であり、橋口の意向で殖産局へ採用されている。

また、新渡戸とは東京英語学校、札幌農学校で共に学び、札幌時代から公私に渡って交流を重ねた（柳本通義の生涯^[16]）。新渡戸の不在中は殖産局長代理も任されていた。

1905年、柳本は恒春庁庁長、殖産局恒春熱帯植物殖育場技師となり、新渡戸の奨励の下、当時3年目で試植中だった珈琲木の栽培が本格的に始動した。

1907年、殖産局博覧会委員会を兼務していた委員長の柳本と幹事の横山は、上野公園で行われた東京勸業博覧会にこの珈琲を出品している。

また、柳本は次項の川上瀧彌を推薦し、台湾総督府殖産局に採用された。

川上瀧彌（札幌農学校第18期生）（台湾在勤1903-1915）

1903年、川上は植物学教室の恩師宮部金吾へ手紙を送り、宮部と札幌農学校の同期の新渡戸稲造への進言を依頼し、殖産局長代理として柳本通義が推薦し、台湾総督府殖産局に採用された（この経緯は「台湾へ渡った北大農学部卒業生たち」⁵に詳しく述べられている）。

川上の主たる業務は、台湾総督府の財政に有益となる植物の調査であり、台湾全島をくまなく踏査し、1910年『台湾植物目録』を編纂し、1915年台湾総督府博物館（現国立台湾博物館）の初代館長に就任した。

1903年、川上は横山と台北のミカン園で病虫害の調査を行っている^[17]。

二人は踏査を重視する研究者同士であり、幾度と無く埔里を訪れている。

1907年、川上が助手と埔里を訪れ、アラビカコーヒーノキの標本を採集した（図3）。

川上による「嗚呼横山先生」^[18]には「臺灣に赴任せる折は、先生は公私とも何かと懇切を盡され、余の研究調査などには一方ならず便宜を與へられたり」とあることから、十年前の1897年に横山が埔里で珈琲栽培に意気込んでいたが、その情報を基にこの標本が得られたに違いない。

1907年以降1915年まで、植物標本のラベルによると毎年のように川上が埔里を訪れていることから、埔里のコーヒーノキについても精通していたことが窺える。



図3 1907年埔里アラビカコーヒー（林業試験所植物標本館所蔵）

北大演習林の開設と北大卒業生がつないだコーヒー

1917年、台湾地理中心の埔里に北大演習林（北海道帝国大学農学部附属台湾演習林派出所）が開設された。

1920年、菱葺屋根が特徴の北大演習林事務室が建築され、2011年、南投縣政府歴史建築に古跡指定される（図4）。

この菱葺屋根は、北大演習林職員の子孫時代の旧林学教室の古河講堂や、旧札幌農学校演武場の

札幌市時計台など古い北大建築物に見られ、雪に強い構造を持つ。降雪のない埔里にこの菱葺屋根が用いられた北大演習林事務室は、北大建築物の証拠だと言えよう。

1920年の埔里では、1895年橋口が取り寄せた珈琲の種子が、1896年横山によって播種され、1907年に川上が標本として採集し、そのコーヒーノキがさらに繁殖していたのは間違いない。

次項の笹尾修道によれば、樹齢十二、三年生とある^[19]。このことから、北大演習林のコーヒーノキは、横山が植え、川上が標本を採集した子孫の苗が、川上とつながりがあった北大演習林職員によって1920年頃に植えられたと考えられる。



図4 旧北大演習林事務室（南投縣政府歴史建築）とコーヒーノキ 2022年11月撮影

笹尾修道（北海道帝国大学林学実科大正12年卒）（北大演習林在勤1930-1937）

年表（笹尾修道による北大演習林珈琲）

1	1931	12月 北大演習林の珈琲園で栽培されたコーヒーを製造する
2	1933	3月、12月 コーヒーノキを播種
3	1934	7月 北大演習林の副産物としてコーヒー栽培を挙げる
4	1936	3月、6月 1933年に播種し育苗したコーヒーノキを定植
5	1938	12月 本島コーヒー栽培史上に未だ嘗て見ない好成绩を挙げる

年表1 開設当初、北大演習林では珈琲栽培の計画はなかったが、笹尾が主任の1931年には既に珈琲園ができていたことが新聞記事になってい

る^[20]。そして、この新聞記事が北大演習林による珈琲栽培の最も古い記録となる。以下は新聞記事の抜粋で、笹尾が北大演習林珈琲を製造し優良品を得たこと、副業としても有望なことなどが2500字にわたって詳しく記されている。

台湾日日新報1931年12月14日「盆地で暴風の虞なき 埔里は珈琲の好適地 演習林で立派なコーヒーが出来た 家庭の副業としても有望」(図5)
「埔里街における北海道帝國大學農學部附屬演習林には四十株程の珈琲園あり頃來枝もたわわにルビー宛らの實が稔つてゐたが同演習林主任笹尾修道氏はその實を採取し碎いて試みに粉末のコーヒーを製造してみたところ巷間販賣されてゐる輸入コーヒーに匹敵し優るとも劣らぬ優良品を得た」



図5 1931年12月14日台湾日日新報

年表2 新聞記事の袖見出しに副業としても有望とあり、北大演習林の副産物として珈琲栽培を開始すべく、1933年3月と12月にコーヒーノキを萱野苗圃に播種した^[19]。

年表3 北大演習林開設の翌1918年、初代主任の籠田又平が、演習林派出所主任会議において副産物にして収益を上げるべきもの皆無としたが、1934年の同会議において笹尾はコーヒー栽培を挙げ答申した^[21] (演習林派出所主任会議に対する答申書)。

年表4 「翌12年(11年1936年)3月、天塩第一

演習林に転勤の命令があり、都合で6月なかばまで延びたので、萱野苗圃で育苗したコーヒーの苗を、近くの相思樹造林地に植えた。相思樹はシェードツリーとして利用した。」^[22] とあることから、笹尾は部下の山本光市に依頼して定植したと考えられる^[23]。また、6月は山本が雨龍に転勤したので埔里産と萱野苗圃産を笹尾が定植した^[23]。

年表5 臺灣新民報1938年12月22日「本島の珈琲栽培可能性確認さる 大学演習林の間作好成績」^[24] (図6) には、「本島コーヒー栽培史上に未だ嘗て見ない好成績を挙げ」とあり、この北大演習林の珈琲栽培の成功は台湾珈琲の歴史として注目に値する。しかしながら、この新聞記事は台湾珈琲の史料としてこれまで埋もれていたものであった。

なお、笹尾は1937年7月に天塩第一へ転勤し、後任の城生鉄血によってコーヒー定植地の手入れが行われたが、1938年の珈琲栽培の成功は笹尾の努力によるものと言えるだろう。



図6 1938年12月22日臺灣新民報

現在の北大演習林と林平三氏のプレートへの反論

2022年から、埔里の旧北大演習林は中興大學埔里實驗林文創園區として、中興大學智慧運輸發展中心が管理している。旧北大演習林の敷地を囲って休園状態となっており、以前の様に北大演習林事務室を間近に見ることはできない(2024年4月現在)。

2023年には、旧北大演習林事務室内に林平三氏の文章付きのプレートが壁に掲げられた。この

プレートでは以下の①②③のように「林平三氏が最後の日本人所長として、北大演習林珈琲の栽培を、開始・成功・基礎を築いた」となっている。そこで笹尾修道氏の名誉のために以下に反論する。

① 日本統治時代の最後の埔里演習林所長(1940年9月-1946年7月)であり、最後の日本人所長であった

→林平三氏の在勤期間は1940年9月-1945年3月(3月5日付けで退職)であり、最後の日本人所長は在勤期間1944年7月-1947年3月の佐々木準長氏である^[25]。

② 台湾にて北海道大学珈琲の栽培方法の研究を開始し、栽培に成功

→年表2、3、4、5のように笹尾修道が北大演習林珈琲を副産物として、1933年に栽培方法の研究を開始し、1938年には成功している。

③ コーヒー栽培も在任中に基礎を築き

→年表2、3、4のように笹尾修道がコーヒー栽培も在任中に基礎を築いている。

②③について

→北大演習林就任前の林平三氏による1939年の新聞記事によると「昨年(1938年)から始めた演習林経営のコーヒー園もあり」^[26]と、笹尾修道が副産物として開始したコーヒー園が、その後経営されていることが林平三氏自身によって報告されている。

「蕃地を踏査して - 台湾にある北大の演習林 - 林平三氏の土産話」(1939年3月4日東京朝日新聞北海道版)

幻の北大演習林珈琲の再現

戦後途絶え、幻となってしまった北大演習林珈琲。この北大演習林珈琲を甦らせるべく、筆者は北大演習林と同じ埔里で2020年から栽培を開始した。

埔里で栽培されていた北大演習林珈琲は、「殆ど手入れをしない」ことがわかっている^[20]。こ

れを無肥料・無農薬の北大式自然農とし、北大演習林珈琲の再現に取り組んでいる。

具体的には、生態系へ悪影響を及ぼす外来種植物の駆除を続けながら、埔里に自生する多種多様な植物をシェードツリーとして育成し、北大演習林珈琲の子孫を栽培している。4年経過した現在では、百年前の生態系へ回復しつつあり、動植物にあふれる生物多様性豊かな珈琲園となっている。

この北大式自然農での珈琲栽培は、慣行農法に比べ生長が極めて遅く、収穫量も極めて少ない。また、シェードツリーの育成には数年以上かかるため、今のところ収穫量はほとんどない。目下、シェードツリーが高くなる数年後の安定供給を目指している所である。

終わりに

1895橋口文蔵→1897横山壮次郎→1901新渡戸稲造→1905柳本通義→1907川上瀧彌→1917北大演習林

1895年北大校長からスタートした珈琲栽培が、駅伝の襷のごとく北大卒業生たちにつながり、1917年開設の北大演習林でゴールした。

それから百年。

2017年に北大演習林百年祭を開いた北大卒業生が、笹尾修道から襷を受けとった。

先輩たちがつないだ歴史の重みを感じつつ、幻となった北大演習林珈琲を甦らせていきたい。

参考文献一覧

- [1] 菅大志, “演習林と珈琲の百年物語,” 台湾情報誌「交流」, pp. 7-14, No. 921, 2017.
- [2] 菅大志, “続・演習林と珈琲の百年物語,” 台湾情報誌「交流」, pp. 8-17, No. 923, 2018.
- [3] 菅大志, “台湾珈琲の歴史再発見埔里演習林,” C³offee 珈琲誌, pp. 38-40, vol. 10, 2017.
- [4] 菅大志, “台湾通信,” 北大生協「きぼうの虹」, No.375-No.388, 2018-2020.
- [5] 山本美穂子, “台湾へ渡った北大農学部卒業生たち,” 北海道大学大学文書館年報, pp.

- 15-41, 2011.
- [6] 橋口兼清, “橋口文藏遺事録,” p. 153, 1906.
- [7] 田代安定, “横山壯次郎君「故横山壯次郎君追懷録」,” pp. 120-121, 1910.
- [8] 山田正通, “珈琲栽培状況調査復命書,” 1897.
- [9] 木村匡, “布哇咖啡及マニ烟草種子取寄方外務省へ依頼,” 明治二十八年乙種永久保存第二十四卷, 臺灣總督府檔案, 1896.
- [10] 田代安定, “横山壯次郎君「故横山壯次郎君追懷録」,” pp. 106-107, 1910.
- [11] 横山壯次郎, “明治三十年五月中埔里社撫墾署事務報告,” 埔里社撫墾署, 1897.
- [12] “明治三十年七月中埔里社撫墾署事務報告,” 埔里社撫墾署, 1897.
- [13] 新渡戸稲造, “横山壯次郎君「故人を懷ふ」,” p. 40, 1910.
- [14] 千朶木仙史, 学界文壇時代之新人「農學博士法學博士新渡戸稲造氏」, 天地堂, 1908, p. 2.
- [15] 田代安定, “前殖産局長新渡戸博士来場ノ事,” 恒春熱帯植物殖育場事業報告第5輯, p. 267, 1914.
- [16] 神埜努, 柳本通義の生涯—クラークの直弟子・札幌農学校第一期生, 共同文化社, 1995, p. 269.
- [17] 川上瀧彌, 「台北に赴任して」1903年12月4日付宮部金吾宛て川上瀧彌書簡, 1903.
- [18] 川上瀧彌, “横山壯次郎君「嗚呼横山先生」,” pp. 139-140, 1910.
- [19] 笹尾修道, “臺灣演習林派出所,” 演習林彙報第一輯, p. 124, 1933.
- [20] 台湾日日新報, 盆地で暴風の虞なき 埔里は珈琲の好適地 演習林で立派なコーヒーが出来た, 1931年12月14日.
- [21] 笹尾修道, “演習林派出所主任会議に対する答申書,” 北海道帝國大學農學部附屬演習林, 1934.
- [22] 笹尾修道, “台湾、天塩第一、雨龍演習林の思い出,” 北大演習林80年, p. 64, 1981.
- [23] 北海道帝國大學農學部附屬臺灣演習林, 臺灣演習林造林基帳.
- [24] 臺灣新民報, “本島の珈琲栽培可能性確認さる 大学演習林の間作好成績,” 1938年12月22日.
- [25] “職員名簿元演習林台湾演習林,” 北大演習林80年, pp. 171-172, 1981.
- [26] 東京朝日新聞北海道版, “蕃地を踏査して—台湾にある北大の演習林—林平三氏の土産話,” 1939年3月4日.